

# 物体を身体に喩える理由：認知の世界

沖本 正憲

## 1. はじめに

日本語において、「椅子の脚・肘／腕・背」「山の頭頂・肩・腹・背・足」「壺の口・首・耳・胴」「茶碗の口縁・胴・腰」「ギターの頭部・首・胴体」など、同一の物体において身体部位詞を物体部分詞に複数転用する例が知られているが、このような現象は以下のように英語でも見られる。

“the leg/arm/back of a chair”

“the head/shoulder/flank/ridge/foot of a mountain”

“the mouth/neck/ear/trunk of a pot”

“the mouth/trunk/bottom of a bowl”

“the head/neck/body of a guitar”

これらの写像は、身体部位の構造(位置、形状)と機能が物体の全体と部分の関係においても類似性を見出すことができるため、身体部位を物体部分に投射することで身体部位詞を物体部分詞に比喩的に拡張することによる(Matsumoto 1999, 松本 2000)。

認知とは、ある対象について人が知覚・連想・記憶・思考・学習・推論・判断・注意などの様々な処理を行う知的システムのことを指す。人の身体部位を表す語が、比喩を介して物体部分に転用される背景には認知の問題があると考えられている(沖本 2009a, 2010)。本稿では、人の身体全体を対象物全体に写像する認知手段を身体投射(human body projection)と呼ぶことにし<sup>(1)</sup>、人は何のために身体投射を用いるのかについて、トンコリ、建物、寺院を事例として考察する。

## 2. Lakoff & Johnson (1999)

人は身体化された精神をもっており、概念システムは身体を通じて生じ、形作られ、意味を与えられている。Lakoff & Johnson(1999: 34-35)は、自動車や船などの可動物は主たる進行方向に面する部分を私たちは前面と捉えており、テレビや冷蔵庫な

どの静止物は使用時に人と対面している向きを正面と理解していると述べている。これは、身体性に基づく概念を他領域にも写像し概念化していることを意味し、そのため、たとえば前庭や裏庭は、人間の感覚運動性に基づいて概念化された建物の空間関係によって決定されている。

前後という空間概念は身体に基盤を置いており、人間の運動性、視覚、他と相互作用するときの向きと関係する。そして、この関係を様々な対象物にも写像している。押す、引く、進ませる、支える、バランスをとるなどの基本的な力動性の図式は、手足などの身体部分とその動きで理解される。また、身体は空気と栄養物を摂取し、老廃物を排出する容器であると見なすことができる。この身体経験を基盤にして私たちは容器から物を出し入れしており、建物、部屋、寝台などの生活環境についても、容器との関係で自分の身体の位置づけを行っている。

このような Lakoff & Johnson(1999)の分析に従うと、先の物体部分詞の例のように、身体投射が「対象物の構造や機能を簡略に把握する」手段として役立っていることがわかる。これが身体投射の1つ目の理由である。

## 3. トンコリ

アリゾナ州の西アパッチ語では、自動車の部品に身体部位を構造的に拡張している。たとえばヘッドライトが目、前後輪が手足、フロント・フェンダーが肩、ディストリビューターが心臓、ラジエーターが肺、バッテリーが肝臓、ガソリン・タンクが胃を意味する(Basso 1990)。

一方、弦楽器のトンコリは人の精神世界と関係があるという点で、構造理解を目的とした西アパッチ語の自動車の例とは異なる。身体部位を表す語が複数用いられる楽器にはギター、チェロ、フルートなどがあるが、身体投射の典型的な楽器に樺太アイヌ

に伝わる5弦琴トンコリがある。トンコリの形は女性をモデルにしていると言われ、非常に多くの身体部位詞を物体部分詞に転用している。トンコリの各部分は、最上部を頭、その下を首、首にある弦巻を耳、弦巻を入れる空洞を耳の穴、胴の中心部の穴はへそと呼ばれる。また、上から肩、胸、背中、腹、心臓、腰、下腹部、足、陰毛(弦を止める部分に動物の毛皮を貼った部分)、陰部、陰門、膣口と呼ばれる部分がある。

トンコリは、本来は楽器ではなくシャーマン(巫女)が所有する祭具であり、胴の中心部にあるへそと呼ばれる星形の孔からガラス玉を入れると、トンコリに生命が宿るとされた(宇田川 2002)。このことは、トンコリが身体の模倣を前提として作られたことを意味するだけでなく、身体の模倣は宗教や思想などの精神世界と深い関係があるということを推測させる。

#### 4. 建築

建築用語には「骨組(skeleton/frame)」のように、建物と身体との構造的な関係を示す例が多く見られる。「躯体(framework)」とは建物の主要構造部分を指し、日本語同様、英語でも身体を示す語(body/skeleton)を当てている。また、フランス語から借用した「ファサード(façade/facade)」とは外観の主要部分となる面であり、一般に主要な入口のある正面のことを指す。ファサードは英語の“face”と同語源である。建築資材では、「背割線(back boundary)」「背圧(back pressure)」「背部通気(back vent)」「腹付盛土」「腹鉄筋」「腹材(web member)」「柱頭(capital)」「柱脚」「物体力(body force)」「基礎(footing)」「鴨居(head jamb)」「上框(head rail)」「心木」「心鉄筋」「心押え」などが、この例である。また、構造物を構成する梁、柱、壁、筋交などを「部材(member)」というが、英語の“member”とは肢体のことである。

一方、身体投射が建物の構造や機能の理解を目的とするものではないと考えられる例がある。耐用年数についてある建物が今後何年ぐらい使用できるかという期待値を日本語では「余命数」と表現されるが、この表現は人の身体的属性が建物に投射されていることを意味する。実際、美術史研究者の小澤京子は、「建築物をひとつの身体に喩えるならば、皮

膚にあたるのは外壁である。建築物が時間の手に晒され続ける限り、傷や病、あるいは老いは、不断にその皮膚を脅かし続けることになる」と述べている(小澤 2005: 218)。

窓を目、出入口を口と見なすことがあるように、家屋を身体に見立てることは世界各地で古くから行われており、家屋から集落や宇宙に至るまで身体モデルが使われている(沖本 2010, 2013a, 2013b)。たとえば文化人類学者の山口昌男(1986)は、インドネシアのフローレス島の中央丘陵地帯に住むリオ族の大きな儀礼家屋サオ・リアについて報告している。リオ族の神話を考察すると、[身体~家屋~宇宙]に一連の繋がりがあることがわかる。サオ・リアは座って出産する女性の姿を模倣して建てられており、家の中央天井から一本の太い綱が垂れている。この天井からの太い綱は、母胎と個人をつなぐへその緒を意味すると解釈される。サオ・リアの構造は、女性の身体モデルを通じて「家屋~社会~宇宙」が互いに照応関係にあることを意味しており、棟には天上神である月と太陽の子が宿ると考えられている。建物の内部は、一番奥にある隠居部屋が頭、その手前に設置された空間を仕切るための板が胸、部屋中央の天井から綱が垂れている大広間が腹、大広間左右の部屋が両腕、入口内部の左右にある炉が両脚という間取りになっている。このように、サオ・リアは身体を建物に投射することでリオ族の精神世界を具現化している。

#### 5. 禅宗寺院

山や川などの自然環境を構造や機能の類似性から身体に喩えることは、日本に禅宗が伝わる以前の中国に見られる。漢の時代に書かれた『淮南子』には「天地宇宙は一人の身なり」という記述があり、人がもっている気を媒介にして天に影響を与えることができる。これは古代中国の風水思想の根底にある考え方であり、風景は身体の中で再現される(加納 2001)。

日本の禅宗寺院では、伽藍配置を身体に見立てることがある。たとえば曹洞宗永平寺の七堂伽藍では法堂が頭、仏殿が心臓、僧堂が右手、大庫院が左手、東司が右脚、浴司が左脚、山門が腰部を表す。また、曹洞宗瑞龍寺の七堂伽藍では身体との関連が明確に示されており、総門付近に伽藍復元図が掲示されて

いる。復元図には人体表相図が示されており、北を上にして「方丈一頭、法堂一胸、佛殿一心、山門一隠、廚庫一左手、僧堂一右手、浴室一左脚、西浄一右脚」とある(沖本 2013a, 2013b)。

筆者は構造や機能の把握以外に、七堂伽藍を身体に見立てる理由があると見ている。それは、日本の神社仏閣において禅宗寺院の他に伽藍を身体に見立てることがないため、禅宗独自の理由があったはずだと考えるからである。そこで切紙と木割書を分析すると<sup>(2)</sup>、人体表相図の姿が人のものもあれば仏のものもあること、一部の人体表相図には五輪(密教では五大)の書き込みがあることに気づく。仏教では宇宙は五大から構成されていると見なす。空海の教え「即身成仏」とは行者と大日如来の一体化を意味し、この教えは禅宗にも大きな影響を与えた。長谷川家に伝わる木割書に「佛閣ハ法也人繪ヲ以テ左右ヲ知ラス」(内藤・藤木 1972 : 22)とあるように、身体投射は「修行僧～七堂伽藍～五大」の照応関係を示す手段だと考えられる(沖本 2013b)。

## 6. 物体の構造や機能の理解

小惑星探査機「はやぶさ」の運用室のスタッフは、小惑星イトカワをラッコに見立てた。その地理を簡略に理解するとき、彼らは位置を緯度・経度で伝える代わりに「ラッコの左脇腹／お尻のあたり」という表現を用いた(川口 2010 : 116)。私たちはこれと似たようなことを、身体を用いて行っている。たとえば壺の構造を捉えるために、口は位置(上部)、形状(細長い小さな穴)、機能(液体の注入)の類似性に、胴は位置(中央部)、形状(大きな塊)の類似性に基づいて、身体部位詞を転用した物体部分詞を用いている。

身体投射は周辺環境を認識するための知的システムであり、それは人の身体的経験に基づくため、言語や文化の枠組みを超えて見られる。たとえば日本語、中国語、英語、フランス語で山の麓は「山足」(日)、「山脚」(中)、“the foot of a mountain” (英)、“le pied d’une montagne” (仏)というように足を<sup>(3)</sup>、また、壁の表面は「壁面」(日)、「牆面」(中)、“the face of a wall” (英)、“surface d’un mur” (仏)というように顔を用いて表現される(Lehrer 1974, 沖本 & Norman 2010)。

認知言語学では、外界を認識する基盤は人の身体

経験に根ざすと考える。自らの身体に照らして対象物を理解しようとするのは、指を使って計算するのと同様、わかりやすく納得しやすい方法である(Gibbs 2006)。たとえば擬人化は人のもつ知識を最大限に活用し、自然、できごと、抽象概念、無生物などを理解する手助けとなっている(Lakoff & Johnson 1980, Lakoff & Turner 1989)。私たちは、不明瞭なものを明瞭なものに、構造がよくわからないものを既知で構造をよく知っているものに、直接的な経験をもちたいものをすでに経験済みなものに喩え、身体的な経験を基盤にして様々なものを概念化している(尼ヶ崎 1990 : 136)。

このように、認知言語学では身体メタファーを用いる理由は、身体を物体と同一化することで対象物を主体的に理解するためであるとしている。筆者はこの考え方を身体投射に適用し、身体投射は「対象物の構造や機能を簡略に把握する」ための手段だと見なす。しかし、この理由だけをもって、先に見た建物の「余命数」のような身体的属性が写像される理由、トンコリについて身体の綿密な模倣が呪術に必要とされる理由を説明することはできない。

## 7. 人の属性をもつ物体

人は他人と接触する機会を多くもつことで親近感を増す。それは相手に対する知識が豊富になることが、相手への親近感を補完するからである。これと似た関係が人と物との間に見られる。たとえば野球選手とバット、ゴルファーとゴルフ・クラブ、演奏家と楽器、釣師と釣竿、料理人と包丁のように、使用者と道具の間には愛着や信頼といった関係が存在する。道具を巧みに操る人にとっては、道具がまるで身体の一部かのように道具の先端の感覚までわかる(楠見 2002, 佐伯 1986, 鈴木・植田 2003, Czikzentmihalyi & Rochberg-Halton 1981, Norman 2007)。これは身体像の成立を前提とした認知機能であり、拡張自己(extended self)の一種と見なされる。拡張自己とは、物体を所有・統制することによって自己意識の領域が拡大され、その物体を自分自身の一部だと認知することである(Belk 1988)。このような道具と人との関係は、日本における「人形／針／眼鏡供養」といった無生物に感謝の念を示す行事にも見られる(沖本 2012)。また、JAXAの川口潤一郎は、「やっとの思いで帰ってき

た彼に、最後に故郷を見せてあげたい」という気持ちで、大気圏再突入前に地球の写真を「はやぶさ(彼)」に撮影させた(川口 2010: 20)。

人は他の生物や無生物についてより、人についてのほうが経験的によく理解している。そのため、対象物を人と見なすことができれば、物体に対する様々な思いを表出したり理解したりすることは一層容易で自然なものになる。つまり、構造や機能の類似性に基づいて身体投射が実現されると、人形に対する心理のように、今度は「対象物に人の属性を写像する」ことが可能になる。これが身体投射の2つ目の理由である。このような例は建物の「余命数」の他に、古代ギリシア建築の柱の様式があり、彼らは人の外形を柱の形状や装飾に写像してドリス式を男性、イオニア式を女性、コリント式を少女の姿に見立てた。また、玉座や社長の椅子のように、椅子は世界各地で古くから座る人の権威の象徴と見なされてきたが(多木 2006)、座る人の地位や権力といった属性もまた椅子に写像されてきた。無生物のニックネームも同様で、T型フォードは「ブリキのエリザベス(Tin Lizzie)」と親しみを込めて呼ばれ、気品ある女性の姿を写像したエッフェル塔は「鉄の貴婦人(La dame de fer)」、マラガ大聖堂は「片腕の貴婦人(La Manquita)」と呼ばれてきた。

## 8. 精神世界と生活環境を結ぶモデル

人間の抽象的な概念能力は、経験に基づいた具体的な・身体的な認知機構からのメタファー的拡張によって可能になっている。人が精神世界を捉えようとするとき、身体メタファーを媒介させると一層理解が容易になると考えられる。リオ族などの家屋の身体モデルを考察した山口(1986: 57)は、「我々は今日でも、手、足、目、口、尻、腹、肝、上半身、下半身、姿、といった身体を表わす言葉を、社会的事象を説明するのにしばしば使っている。これを上・下、裏・正面・背という空間表象の差異を示す言葉と重ね合わせて使われていることを思い合わせると、我々がこの章で考えて来た一風変わった世界についての説明原理としてのモデルは、我々が心の奥底で、世界と和合して合一するために密かに使っているものとそれほど違ってはいないはずである」と述べている。

このように対象物を身体に喩えるのは、身体経験

を基盤にして精神世界と人間との橋渡しの役割を物体に与えるためだと考えられる。先に見たトンコリ、サオ・リア、日本の禅宗寺院の七堂伽藍は、身体モデルに基づいて宗教や思想などの精神世界を捉える事例であり、「対象物を人の精神世界と結びつける」ために身体投射を用いている。これが3つ目の理由である。

## 9. おわりに

本稿では、人の身体全体を対象物に写像する理由について3点考察した。1点目は対象物を人に見立てることによって構造や機能を簡略に把握するため、2点目は人の属性を物体に付与することによって対象物の性質を明らかにしたり対象物に対する思いを共感できる形で表現したりするため、3点目は精神世界と生活環境を結びつけるため、という理由である。身体投射とは、「モノのヒト化」を通して人の生活環境を主体的に理解しようとする認知手段なのである。

## 注

- (1)自動車、飛行機、船などの動力機械の例では感覚運動性の類似が身体投射を一層動機付けているが、その身体は必ずしも人とは限らず動物のこともあるはずだという反論が予想される。しかし、本稿では人以外の生物についても、人の身体認識に基づいて他の生物の身体部位を捉えていると見なすため、究極的には身体投射の基盤は人にあると考える(Allan 1995)。その証拠として、私たちには足は人の身体を支えて歩行する部位であるという認識があるため、犬や猫を4本足の動物と見なす一方で、「犬がお手をする」「猫が手をなめている」というように、該当部位は人の手に対応する部位であるという認識がある。
- (2)切紙とは嗣法三物に関する口伝、種々の儀礼在家法要、宗旨の秘訣等を紙に記して秘密伝授されたもの、木割書とは寺院建築の棟梁たちの間で代々伝わる設計書のことである。
- (3)「山の麓」は日本語と英語で足を用いて表現することができるため、一見すると同一の捉え方のように見えるが、事実はそのような捉え方ではない。英語“foot”の意味拡張のベースにある山とは、アルプス山脈に見られるようなそびえ立つ険しい山のことであ

り、日本や韓国で見られるような小高い山を意味するものではない(山梨 1988: 150-151)。したがって、“the foot of a mountain”と「山足」はあくまでも類似した写像であり、写像関係が相互の言語で全く同一という意味ではない。

## 参考文献

- 尼ヶ崎彬(1990)『ことばと身体』勁草書房。
- 宇田川洋(2002)「ところの民族考古学」, 西秋良宏・宇田川洋(編)『北の異界』143-147, 東京大学総合研究博物館。
- 沖本正憲(2009a)「身体部位詞の比喩的意味拡張と顔の認識」, 『苫小牧高専紀要』44: 64-79。
- 沖本正憲(2009b)「心臓血管系のメタファー」, 『月刊言語』38(10): 106-107, 大修館書店。
- 沖本正憲(2010)「身体性から見た科学分野のメタファー」, 『苫小牧高専紀要』45: 15-34。
- 沖本正憲(2012)「お守りと科学」, 『苫小牧／千歳民報』2012/3/7, 苫小牧民報社。
- 沖本正憲(2013a)「日本の禅宗寺院」, 『雪の音』117: 16-19, 建設コンサルタンツ協会北陸支部。
- 沖本正憲(2013b)「禅宗様伽藍配置と身体メタファー」, 『苫小牧高専紀要』48: 31-63。
- 沖本正憲・Donald A. Norman(2010)『科学と人間のための英語読本』開拓社。
- 小澤京子(2005)「都市の解剖学」, メディア・デザイン研究所(編)『10+1』40: 218-224, INAX 出版。
- 加納喜光(2001)『風水と身体』大修館。
- 川口潤一郎(2010)『はやぶさ, そうまでして君は』宝島社。
- 楠見孝(2002)「インタフェースデザインにおけるメタファー」, 『デザイン学研究特集号』10(1): 64-73。
- 佐伯胖(1986)『認知科学の方法』東京大学出版会。
- 鈴木宏昭(1996)『類似と思考』共立出版。
- 鈴木宏昭・植田一博(2003)「コミュニケーション的インタフェース論」, 原田悦子(編著)『「使いやすさ」の認知科学』2-28, 共立出版。
- 多木浩二(2006)『「もの」の詩学』岩波現代文庫。
- 内藤昌・藤木良明(1972)「寺の空間」, 三輪正弘(編)『空間をとらえる』18-23, 彰国社。
- 松本曜(2000)「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張」, 坂原茂(編)『認知言語学の発展』317-346, ひつじ書房。
- 山口昌男(1986)『文化人類学の視角』岩波書店。
- 山梨正明(1988)『比喩と理解』東京大学出版会。
- Allan, Keith (1995) “The anthropocentricity of the English word(s) *back*.” *Cognitive Linguistics*, 6(1): 11-31.
- Basso, Kieth (1990) *Western Apache Language and Culture*, Tucson: The University of Arizona Press.
- Belk, Russel (1988) “Possessions and the extended self.” *Journal of Consumer Research*, 15(2): 139-168.
- Czikzentmihalyi, Mihaly, and Eugene Rochberg-Halton (1981) *The Meaning of Things*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Gibbs, Raymond (2006) *Embodiment and Cognitive Science*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh*, New York: Basic Books.
- Lakoff, George, and Mark Turner (1989) *More than Cool Reason*, New York: Chicago: The University of Chicago.
- Lehrer, Adrienne (1974) “Extended meanings of body-part terms.” *International Journal of American Linguistics* 40: 135-137.
- Matsumoto, Yo (1999) “On the extension of body-part nouns to object-part nouns and spatial adpositions.” *Cognition and Function in Language*: 15-28.
- Norman, Donald A. (2007) *The Design of Future Things*, New York: Basic Books.
- Yamaguchi, M. (1989) “NAI KÉU, A ritual of the Lio of central Flores.” *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 145 (4): 478-489.